倉橋惣三著「幼稚園眞諦」について

山下俊郎

真理はつねに生きている。

倉橋先生の「幼稚園真諦」が復刊された。この書の初版が出たのは昭和九年であったから、それ以来すでに二十年の月日が流れている。初版が出たころ、ちょうど幼児への関心が私自身の心の中でいよいよ高まつて来つつある頃なので、むさぼるように読んだことを記憶している。幼児の幸せのために、幼児の生活のために、幼児の生活に忠実でなければならないという心構えは、わたくし達が倉橋先生に教えていただいた最も根本的な心構えである。この書の初版が出た頃から二、三年たって日華事変、引き続いて太平洋戦争へと、時が移るにつれて我が国には大きな動きがあった。われわれの宝である幼児達の生活にも幾度かの危機があって、幼稚園というものが深刻な迫害を受けた。終戦まぎわの半年ないし一年の間は、とくに大都会にある幼稚園は有形的無形的に壊滅して行った。しかし、この間にあって幼児教育者は、何にも増して幼児の生活を守り、彼等をまっすぐにのばすことに対する情熱をもやし続け、幼児を守りぬいたのである。このような何にも屈しない幼児への情熱の源泉は常に倉橋先生によって育てられたものであった。

終戦後、学校教育法が制定されて、すべての学校教育が、子どもや青年を生かし、子どもや青年に忠実であろうという教育本来の姿にようやくもどり、幼稚園もそのあるべき本然の姿にもどることが客観的にできるような状態になった。学校教育法の精神にしたがって幼稚園教育のあるべき姿を示すために、当時の文部省の坂元課長、中谷事務官を督励して、CIEのヘファナン女史と協力して保育要領を作ることに最も大きい力を尽して下さったのは倉橋先生であった。保育要領そのものには今となつて考えればまだ多くの問題が残されているのであるが、委員達の分担執筆したものにいろいろと手を加え整理して下さったのも倉橋先生だったのである。終戦後のあわただしい世の中の流れの中にあって、荒れはてたきびしい世の流れの中にあって、幼児教育者が逸早く教育復興の道を歩くことができたのは、まったくこのような倉橋先

生の終始変らない幼児への深い熱愛によって導かれてきたからである。

終戦後の初等教育の領域ではカリキュラム論議がさかんであつた。私はいつもいつていることであるが、小学校以上の学校の教育では今頃になってカリキュラム論議でさわいでいるが、幼児教育の世界では二た昔前からカリキュラムのことを考えている。保育案というと、名称こそちがうが、これがとりもなおさずカリキュラムなのである。そしてその最も正しい――というのは幼児に忠実な――在り方を示して下さったのが倉橋先生だったのである。

このようにきわめて断片的に考えてみても、倉橋先生が私達に教えて下さったことは、誠に大きいそして重いものなのである。その倉橋先生は、折にふれ実によく語られ、また書かれるのであるが、先生の精魂を打ち込んで来られた幼稚園の教育について、まとまった体系的な書物として、書物の形で残されたのは私の知る限りではこの度の幼稚園真諦の初版一つだつたと思う。絶版後二十年もたって、ことにその後幼児教育に身を投じてこられた若い先生達に、この書物の眼にふれることが望めなかったのは、わたくし達にとって誠に残念この上もないことであった。それがようやく復刊されたのである。若い先生達は必ず読まれたい。また先輩格の先生達もまた改めて読んでいたゞきたいものである。

この書物はもともと日本幼稚園協会の講習会で、先生の講義されたものの速記に先生が加筆訂正をされたものである。そただけに、ちようど眼の前に先生が居られて、その講義をうかがっているような気がしてうれしい。しかし、戦前の初版とくらべて見ると、「保姆」という字が「先生」という字にかわっているというように一、二の字句の訂正だけで、根本の精神はそっくりそのままもとの先生の言葉のままで、今日の幼児教育にぴったりとあてはまるのである。そして、先生御自身で、「終りに」と題して書いて居られる「初版当時新しいと危まれたものが、今日こそよく了解せられると信ずる」という言葉が、私共にとって心に強くひびくものがある。

真理はつねに生きている。「ただ未だ広く実現せられていないことを憂うる」先生の精神を生かしたい。

「教育の思想は、実行せられてのみ初めて生きる」ことを日本の幼児教育者に期待する。

× × × ×